



山村と都市が共存する豊田市で、どんなミライをめざしていくのか。そのミライのフツーをどのように創っていくのか。おいでん・さんそんセンターを運営する(一社)おいでん・さんそんの正会員に想いを語ってもらいます。

第7回 村田元夫 さん

1959年生まれ。(株)ピー・エス・サポート代表取締役。おいでんさんそんセンターの立ち上げに関わり、豊田市山村地域にて「地域スマートビジネス研究会」「ミライの職業訓練校」等、UIターン者の仕事づくりに携わる。最近は、(株)三河の山里コミュニティパワーの一員としてエネルギー事業を活用した地域経済循環に注力している。



♪知らない街を歩いてみたい、どこか遠くへ行きたい♪ 1960年代にヒットした歌謡曲(永六輔作詞、中村八大作曲)のリフレインである。多くの人がこんな気持ちを心のどこかに抱いているはずで、コロナ禍の2年半はなおさらであったろう。この心情は、人類のDNAに書き込まれているのではないかと私は思っている。

現生人類であるホモサピエンスは、約20万年前にアフリカの地上に誕生し、5大陸を渡り全世界に広がって暮らすようになった。長い年月とはいえ、数多くの危険を乗り越え、なぜホモサピエンスは新天地を求めて歩み続けてきたのであろうか。

さて、人類の遊動DNAは簡単に失われないはずで、デジタル時代を迎えて、人々の遊動は再び加速するというのが私が描くミライのフツーである。遊動の形は2つ。一つは、体の遊動、これが暮らしにつながれば移住に進む。もう一つは、マインドの遊動である。コロナ禍のステイホームで、バーチャルツアーや人気を呼び、オンラインによる人々の交流は一般化しつつある。

近年、田舎暮らしに関心を寄せる若者が増え続けているという。都市部での暮らしも必ずしも安心・安全でなくなっている現在、自然資源の豊かな山村部への移住者希望者は増えていく。ただし、煩わしさも伴う定住を選択するのではなく、都市部と山村部、日本と海外を行ったりきたり、多拠点居住を含めた遊動生活のミライが見えてくる。地方の「関係人口」は増えるわけで、これは山村にとっての一大チャンスと捉えたい。

イベント情報

第11回いなかとまちの文化祭

●日時 2022年10月30日(日) 11:00~16:00

●場所 とよしば・ギャザ南広場・人工芝生広場

※雨天決行・荒天中止

●内容

こころを耕すくらしのマルシェ

耕Life編集部/おやつの晴屋/就労継続支援B型よりみち/はやと農園/縁がわジャム/竹々木々工房/はだし感覚シユーズ販売はだし屋/矢作川水系森林ボランティア協議会/山里カフェMui/KINOファーム/いのはな農園&すぎん工房/矢作・森の女子会/押井の里(一般社団法人押井営農組合)/木遊屋/木文化研究所/いとカフェとスパイスのFACTORY/社会福祉法人無門福祉会/Sunlit Earth【采制作室studio-SAI】/農家民宿ちんちゃん亭/信濃屋豆腐店/コレカラフルズ/おいでん市場/旭木の駅プロジェクト/おいでん・さんそんセンター

いなかとまちのシンポジウム

～お米に感謝!山、川、田んぼ、みんながつながる 自分とつながる～
のなかしんご
登壇者:野中慎吾(農業生産法人みどりの里)、宇角佳笑(green
すずきたつし)、鈴木辰吉(一般社団法人押井営農組合)進行:洲崎燈子(豊田
市矢作川研究所)

「稻はこうやって米になりご飯になる」体験会

ミネアサヒを足踏み脱穀機と唐箕で脱穀体験。ミニダップで粉搗り。

いなかとまちのステージ

音の座/kecotico/山里合唱団こだま/おひさま/芳泉会/岡森フォレ
スター/消防ロッカーズ

※新型コロナウイルスの状況により、開催内容など変更になる可能性があります。

※お店店舗などの最新情報は、



耕Lifeホームページ内特設ページで随時更新→

※ご来場の際は感染症対策にご協力ください。

●主催 いなかとまちの文化祭実行委員会

●問合せ いなかとまちの文化祭実行委員会事務局 TEL0565-62-0610
(おいでん・さんそんセンター担当:田中あつこ)

●協力 とよしば、豊田市



昨年度の様子



「つながる力でミライを変える」おいでん・さんそんセンターの活動をご紹介!

おいでん・さんそんSHOW

10月号
2022.10.01発行

旭
あさひ
小原
おばら

PICK UP 旭地区と小原地区で地域の課題解決と魅力発信に取り組む現場を知る

足助高校生徒が地域の実践者に学ぶ研修ツアー



旭地区の旧築羽小学校を活用した施設「つくラッセル」の体育館で話す(株)M-easy代表取締役の戸田友介さん

おいでん・さんそんセンターがツアーを支援

9月9日(金)、愛知県立足助高等学校2・3年生の観光ビジネス類型の生徒40名が、地域の課題解決に取り組む事業所の現場と実践者のお話から地域の現状を知り課題解決のプロセスを学ぶため、旭地区と小原地区を訪れました。

地域で仕事をつくるということ

最初に訪れたのは旭地区の「つくラッセル」。2017年に閉校した旧築羽小学校の跡地を利用し、地域の拠点となっている場所です。かつての校庭は、マレットゴルフ場や販売用の薪の山があり、各教室はレンタルオフィスや工房などに使われています。

1人の講師はつくラッセルを運営している(株)M-easy代表取締役の戸田友介さん。現在、様々な事業を行っている戸

田さんですが、全国から集まった若者10人が地域の空き家を使って共同生活し、農業をしながら地域の一員として暮らす「日本再発進!若者よ田舎を目指そうプロジェクト」が原点だと話します。

学生時代に起業し事業を始めた戸田さんは、2009年に旭地区で始まったこのプロジェクトを運営することになりました。参加した若者たちが共同生活の難しさや農業がうまくいかず焦りが募っていた時に、「あんたらが、いてくれるだけで嬉しい」と地元の方から言われたことが転機になったそうです。評価ではなく自分たちの存在そのものを受け入れてもらった経験が、その後の活動の動機になったと戸田さんは話します。

つくラッセルを拠点に、課題解決に向けた取組が実践されています。そうした取組により活発になった地域にたくさ



①戸田さんに質問する生徒
②自給家族について話す
鈴木辰吉さん
③生徒たちに歌を披露して
くださったデュオ・ル・リアン
のお二人
④歌声に聞き入る生徒

んの人が移住しており、好循環が生まれています。こうした取組を実践する戸田さんは生徒たちに向けて、「お金がないから助け合いや創造性が生まれる。課題が多いから主体的になれて楽しい。『働く』とは人のために役に立つことでお金をもらうこと」と語りました。

話を聞いた生徒たちからは、戸田さんが関わっている「旭木の駅プロジェクト」に関する質問や多忙な戸田さんを気にかける意見が出るなど、生徒たちは戸田さんの活動に興味を持った様子でした。

その後は、つくラッセルの中を自由に見学。ちょうどこの日は、音楽家「デュオ・ル・リアン」のコンサートの練習がされており、たまたま居合わせた生徒たちに、ウェルカムソングを歌って歓迎してくれました。

消費者とつながり、地域課題を解決する仕組み

二人目の講師は、前おいでん・さんそんセンター長で、(一社)押井営農組合代表理事の鈴木辰吉さんでした。「農の存続が集落の持続化と密接に関わっている」と話す鈴木さんは、集落全体で農業を行う旭地区の押井営農組合の活動について説明しました。

旭地区押井町では、今後10年で現在77人の人口が半減し、そのほとんどが離農する可能性があることに危機感を持ち一般社団法人を設立しました。町内の田んぼは全て法人に権利を移し、離農する人がいても耕作放棄地にならず維持できていること。稻作はコストがかかり普通の流通では赤字になってしまうため、消費者と年間契約をし、適切な栽培経費を負担してもらう『自給家族』という取組を始めたことが説明されました。エシカル消費(倫理的消費)の高まりや健康志向、田舎とつながりを持ちたい都会暮らしの人からの問い合わせが相次ぎ、現在98家族が契約し、2.4ヘクタールの農地が荒廃から守られているそうです。

「自給家族の契約者が押井町にお米を取りに来ると、一緒に来た子どもがトンボを捕ったりして遊んでいる。これも観光の1つ。地域の課題を楽しく解決する過程には、観光の要素も含まれてくるのではないかと考えている」という鈴木さんは、生徒たちに向け、地元の人には気づかない山村の魅力や価値が埋もれています。それを活用して山村地域ならではの観光を考えてほしいと語りかけていました。

そこにしかない地域の魅力を伝えるツアー

生徒たちはお昼を挟んで、小原地区の小原交流館へ移動し、広告デザイナーであり、地域資源を活用した観光ツアーを企画する『三河里旅』の鈴木孝典さんの話を聞きました。当日最後の講師を務める鈴木さんは、広告デザイナーという仕事柄、地域の魅力を通じて、それを楽しんでいるたくさんの地元住民に出会い、2020年に地域限定の旅行業の資格を取得し、地域の魅力に触れてもらうローカルツアーを企画しています。

「誰に、何を、どういった見せ方で効果的に届けるのかを考えるスキルは、デザインをする際にも、ツアー内容を企画する際にも必要だ」と話す鈴木さん。最後に、真剣な表情で話を聞く生徒たちに向け、「若いみなさんならではのセンスが必ずあるので、自信を持って様々なことにチャレンジしてみてください」とご自身の実体験を踏まえてアドバイスの言葉をかけていました。

生徒たちに湧き上がる想い!

今回の研修ツアーに関する生徒のみなさんの感想の一部をご紹介します。戸田さんの話を聞いた生徒は、「印象に残ったのは『どんな施設より、誰とするか』という言葉や、誰向けなのか、誰とどんなことをするのかを最も重要視し、事業をする際は『自分たちで創る、お互いをよく知る、共に

働き・感じて・関わることが大事』ということ。今後、足助のおひなさんのイベントに参加する際に大事にしたいです」と話し、鈴木辰吉さんの話を聞いた生徒は、「新たな消費志向や消費者の需要なども考えながら、地域の課題を解決することにもつながる事業をするのはすごいと思いました」と話していました。また、別の生徒は「地域の特色を生かしてツアーを実施し、山間部の活性化を実際に実行していく

いと思いました。地域の方々がガイドになることで深い体験を提供することができるというのもすごいです」と鈴木孝典さんの話を聞き、それぞれの生徒の心にひびいている様子でした。

観光ビジネス類型という「観光にまつわる学び」と単純に思ってしまいます。その切り口はなんと多様にあることでしょうか。すでにそこにいる人・あるものに光を当てること。自然環境含め、背景を探ること。地域課題を自分事と感じ動いてみること。高校生という多感な時期だからこそ、主体的に生きる人々との出会いは貴重な体験になるでしょう。(小黒敦子)



デザイナーであり地域限定旅行業「三河里旅」代表の鈴木孝典さん

report

(一社)モビリティ・ビレッジと共に、『あさひ&とよたハラペニヨプロジェクト』をスタート

旭
あすけ

地域を元気に!(株)ワイズがハラペニヨ味噌を販売開始

CoCo壱番屋のフランチャイズを軸に、農業ビジネスも展開しこれまでにも株式会社山恵や愛知県立足助高等学校とジビエレトルトカレーの共同開発や販売実績のある株式会社ワイズ(以下、ワイズ)は、10月1日(土)から新商品ハラペニヨ味噌の販売を開始します。

ハラペニヨとは、メキシコ原産の青唐辛子。高齢化や過疎化により、野菜作りを諦める旭地区の住民の姿を目の当たりにしたワイズは、ハラペニヨが獣害の被害が少ないと着目し、一昨年から旭地区の耕作放棄地を活用して試験的に栽培を開始しました。

おいでん・さんそんセンターの紹介で、旭地区の野菜を市街地のスーパーへ出荷するボランティアを行う一般社団法人モビリティ・ビレッジとつながり、「ハラペニヨ栽培とその加工品で地域を元気にしたい!」という想いを共有し、『あさひ&とよたハラペニヨプロジェクト』をスタートさせました。モビリティ・ビレッジの会員で街に住む家庭菜園愛好家が種を育苗し、旭地区の地域住民7軒に苗を配り、約200株のハラペニヨが栽培されています。

今回、プロジェクトの商品化第1弾として、旭地区的郷土食

「なっとう味噌」からヒントを得たハラペニヨ味噌を開発。プロジェクトの取組趣旨に賛同した丸加醸造場(越戸町)に製造を委託して、販売を開始することになりました。内容量100グラムで価格は540円(税込)です。販売場所は以下の通りです。ぜひご賞味ください!(坂部友隆)

【販売場所】

記念販売:10月16日(日)旭マルシェあさひ(豊田市小渡町旭観光協会周辺)旭元氣野菜ブース
店舗販売:10月1日(土)より、丸加醸造場、浦野酒造、旭観光協会、スーパー やまとぶ(四郷店と野見山店の産直コーナー)、どんぐりの里いなぶ、山遊里、香恋の里、他

